

まえがき

フェロモンの研究にかかわって30年が経過しました。研究開始当初は野のものとも山のものともつかぬ“フェロモン”でしたが、フェロモンが引き起こすさまざまな現象（行動、記憶そしてホルモンとの協調作用など）に興味をもち、研究室の仲間と、また多くの研究者と共同でそのメカニズムの解明を目指してきました。その結果、いくつかのオリジナルな発見があり、多くの知識が集積されています。

本書の執筆を依頼された際、編者より『『ブレインサイエンス・レクチャー』シリーズは、読者層を大学の学部生～大学院生と考えている』と説明を受けました。そのため、読者は生物学の基礎を習得済みと想定して話を展開しています。本書は、専門分野を理解していただくための細かな解説風の部分と、当該研究分野に興味をもっていただくための読みもの的な部分、そして学術論文にはなかなか書けない筆者らの妄想(?)より成り立っています。本書をきっかけとして、多くの方が生物学に興味をもち、関連の研究分野に進んでいただけたら幸甚です。

一昔前まで、生命科学系の基礎研究は小さな研究室の数名でコツコツ進める研究が主流でした。しかし、科学技術の発展や異分野間の相互理解の伸展によって、1つの事実を突き止めるために多方面からのアプローチが必要となりました。大きな研究室を組織運営している一部の大学教授は別ですが、多くの研究室では単独で行う研究には限界があるため、共同研究と称して複数の研究者と連携してゴールを目指すことを頻繁に行います。本書の中にも、筆者らの共同研究者が頻繁に登場します。研究者生命を左右するのは、共同研究者にどのくらい恵まれるかにかかっているといっても過言ではありません。その点、我々は大変幸運だったと思います。しかし、本文の執筆を終え、このまえがきを書

こうとしている矢先の 2014 年 9 月に、長年の共同研究者であった東京大学の森裕司先生が亡くなりました。20 年来の研究成果であるヤギのフェロモンを同定し、これからの発展が期待されていた矢先でした（詳細は本文参照）。この場を借りて、心から哀悼の意を表します。

最後に、本書執筆にあたり、多くのアドバイスをくださり、本文中にもご登場くださった(独)農業生物資源研究所の若林嘉浩博士に感謝いたします。また、執筆の機会を与えていただいた同僚の徳野博信先生、そして執筆に際して助言をいただいた共立出版編集部の方、山内さんに感謝いたします。

市川真澄・守屋敬子